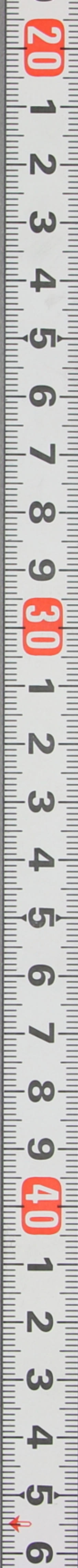




繪本漢楚軍談

七

^ 13  
3565  
7



門 13  
號 3565  
卷 7

訂正 補遺 本漢楚軍談初輯卷之七

東武

鷓鴣負高箕叅述

第十五回

趙高恐誅弒二世皇帝

諸君沛公劉邦の既武關小近付し時先陣の前小進く疆勇を振  
一負の英將小驚き馬と陣頭小乗出さきて是小近付き劉邦小  
遇んと如何なる人かと宣へ彼大將の忽ち馬より飛下り地小拜伏し  
て申様某久く主君を求んと心と尽しひひ小此程君の聖徳を兼ぬ  
りて慕ひ奉る折節今此道を通る玉を聞及雀躑と此地小  
到り先小諸將と戦ひて天兵と拒小あらま此の武藝と知らせ  
奉らん爲るる願くは麾下の一將小用ひ玉へと望けま沛公の大  
喜悅其名を問は答て曰某ハ元洛川の人小と灌嬰と申し少年節



早稲田 大學 図書館  
昭 34.6.3 燹  
藏 書

會本漢楚軍談初輯卷之七

一

鷓鴣負高箕叅述

西川の商賈の爲の紫關を通り一時百餘人の山賊等を行合  
 某一人劍を拔大半賊を斬殺し殘黨を追殺せしむ此より後の紫  
 關の路煩ひる故居民ども今に至りて我名を稱し近頃二世の無  
 道を見て義兵の旗を翻し三千餘騎を驅聚君が仁義を行ふて  
 諸郡服するものと聞此小來りて降を請願の命を輕とて秦を破る  
 の先鋒とせん沛公大ま喜びて重く賞を賜りける尔て大軍を  
 進めらる武關を日夜攻らる抑此關の咸陽の最第一の要害の  
 て朱蒯と云る守將あり緊く守て戦ひ京師へ馬を飛せしむ救  
 と求め曰まはるの楚の大軍の東西より秦を攻て事急る丞相  
 趙高これと聞大ま小敬馬を惶々弥かくて奏聞せしむ將を選  
 援兵と向んと議まはる小誰ありて行んと云りの無り小日夜と分



も早馬の急と告て行ちひ關破さんと報され趙高まは様も無く  
 天子洩聞玉ひるべ必も誅せらんと恐て虚病し出さけり二世皇  
 帝の知むと宮女どもと聚らる日夜酒宴し御座を或夜の夢小郊  
 外へ出さるひ林中より箭の白虎走出御車の左の驂馬を射殺せり  
 と見玉ひて打驚きて醒られき此より御心安らむと者と召て圓を  
 如何あらんと問玉は此涇水の祟り離宮小稜を避玉へとど  
 奏しける二世望夷宮小稜玉ひ齋をる涇水へ白馬を沈め祭ら  
 樂まはる居玉ひが近侍の臣の向せらる近頃諸方の賊徒ども  
 消息如何と問玉は群臣奏して云ける陛下下り知召まねと近  
 頃楚の惣軍勢西東より攻まらる諸國一時小叛り皆悉く  
 秦を攻此關中の破さんと數日の中候はん二世帝の大ま小

驚おどろきて急まじし趙高ちやうかうと召よるれど病やまひと稱なづして出いでるを使つかと以もつて責せらるる。今いま汝なのまれば丞相さうさうの位ゐに居ゐるが如ごとく賊軍ぞくぐんの城下じやうじやに臨まり憂うれむと病やまひと稱なづして出い來きらむ。適あたし言ことと巧たくまし讒ざんを構かまへて李斯りしを殺ころせり。今日こんにち又是また危あや殆うし及およぶ汝なが罪つみの如何いかなると云いせらるるまは趙高ちやうかうの只ただ恐おそれ入いり答こたへさ言こともあつて居ゐるが如ごとく心こころの中なかの計けいとを巧たくまし巧たくまし出いでるが如ごとく咸陽かんやうの令れい。閻えん樂らくの壻むすめをまはして呼よびせらるる又また弟あにも趙成ちやうせい等ら數十人すうじゆにんと聚つどい合あひて天子てんしの人の諫いさを聞きかぬ今いま國くに已すでに滅めんとす況まして賊軍ぞくぐん武關ぶくわんと攻せめ事こと甚し急まじるれば我われ一人ひとりの罪つみを歸かへし禍わざはひ九族くじゆく及およぶんとす汝等なんぢら死人しにんの一族いっしゆくを果たまして誅ちやうせらるるまは免ゆるさん謀計ぼうけいの京師きやうし賊軍ぞくぐん入いり許ゆるり汝等なんぢら兵へいと引ひ具ぐして無端むたん内裏うちへ乱みだり早はやく天子てんしを弑ころす。公子こうし子嬰しえいと君きみとせよ子嬰しえいの扶蘇ふその長子ちやうしを其その為人ひとに

まは生民せいじん悦よろこんで服ふくするん又一また一族いっしゆくも無事むじ多おほく。閻樂えんらく趙成ちやうせい此こゝ義ぎと好このむ。一千餘騎いっせんよきの兵へいと率ひて鑼らと鳴なり鼓こと打う喊かんと作りと騷動さうどう。賊ぞく徒内裏うちへ入いり呼よびせらるる閻樂えんらくの望夷宮ぼういきゆうの門かどに到いたり兵へいと下くだ知しして番兵ばんべいと皆みな悉しつく縛むすせらるる賊軍ぞくぐん内裏うちへ入いり何なにと防ぼねど責せめけきバ士卒しゆしゆ答こたへて曰いはく我輩われらと固守こくしゆする。又また馬うまを一人ひとりも奪うばり入いり有あるんや閻樂えんらく首くびと刎きせらるる喚あき叫こゑんで攻せめ入いり百官ひやくくわん被おつ。惶おそむ。上かみと下したへと及および殺ころさる者もの數かず知らむ。閻樂えんらく趙成ちやうせい急まじに進まむ。まは内宮うちきゆうへ入いり二世帝にせいてい護衛ごゑいの武士ぶしと呼よぶ。震怖ちんぷれて出いでる。ねは内官うちくわん二人ふたり走はり出いで天子てんしを扶たけて逃にげんとす。閻樂えんらく趙成ちやうせい成劍せいけんを拔ひき圍繞ゐりめぐりて大音たいおんあげ。陛下へいか下くだへ不仁ふじん驕暴きやうぼうを。只遊樂ただゆうらくと殺ころ伐たと縦恣じゆうしし。玉たまひて民たみと恤あはれ玉たまねは神人かみん怒いりて天下てんかをむ。自ら

漢書卷之七 史記卷之七

求むる滅亡する我輩が不義のあつて動くまれば二世帝の  
 丞相の何処に在る相見あつて得べけんや閻樂曰く不可見二世  
 帝をなべて介らんぬ丞相の請て一郡の王するを許さんや閻  
 樂答て得ゆさば二世又請ひ介らんぬの萬戸侯を許さんや閻  
 樂答て得ゆさば二世又請て願ひの妻子と共小黔首とする諸  
 公子の中列らんよと許さば許さんや閻樂答て得許さん  
 二世皇帝の哭慟々哀々求めて不已閻樂言をあらげて我  
 丞相の命を受け天下の爲の君を弒ま君今如何の宣ふとも  
 丞相の告らるべきと士卒の不知し劍戟を頻り小閃らせける  
 程の二世帝事の成らぬを見て劍伏して失玉ひぬ閻樂急ぎ  
 馳回り事あらくと報むると趙高乃ち諸臣を聚め二世我諫

聞王の殘暴との専らと天下亂て生民叛く我此故の  
 弒しう素よと秦の王の始皇よりと帝と稱す我今太子  
 扶蘇の子の子嬰を立て王とする六國帝位を奪ひんと競ふ心  
 と止めん諸官の如何思へると問へ衆官尔りと趙高乃二世  
 帝と宜春苑の葬り子嬰小見へて云ける五日の間齋戒し身  
 と潔く一玉璽を受け尔と位小即玉へ子嬰此義小従ひて齋宮  
 小入り齋けり尔て趙公の沛公へ陰の人を遣して關中の地を分  
 ちり王とするらんと約せし沛公態と詐て尔をさんと對われば  
 使者立回り此由を事詳く告るゆ趙高大き喜びて使人  
 と重賞し濟事顔の居しける此時子嬰の密々二人の御  
 子と召まると今趙高の誅を恐る帝を弒し百官の心を安むる爲

會人漢書卷之七

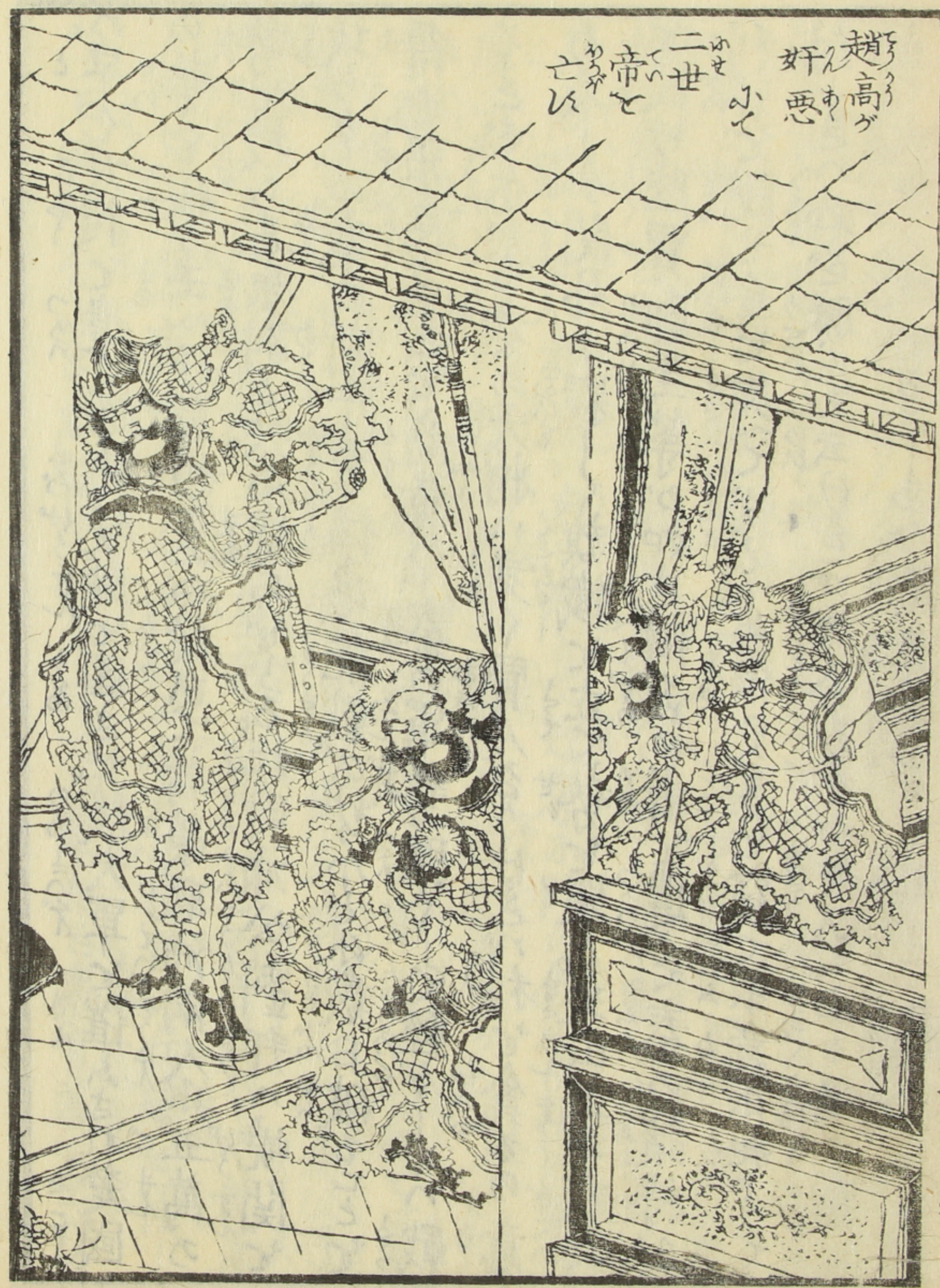
のミ我と立て君とせん五日の間齋戒一玉璽と腐ゆて受と  
 云ふ汝の韓曹李畢と共に兵と齋宮の外伏よ我期臨ん  
 て病と稱し不行の趙高必を來らん汝其時此賊と誅し諸父の  
 讎と雪らうと密告て第五日病と号し齋宮と出さう  
 多商議し如く趙高自ら來りて迎ゆる門の外より伏の勢一  
 度ふ打て出けし趙高大き小驚まて閭樂をさうと呼び  
 李畢の忽ち飛り一鎗小刺殺しける諸軍勢その屍とす々  
 小截分碎て其三族と咸陽の市小出と誅滅は於是公子  
 子嬰九五の位小登らう三世皇帝と號しける百官賀し萬歳  
 と祝せし子嬰宣ふ朕今帝位小登れども楚の兵境を侵  
 り日夜と分とせ攻惱を如何がてり退くべき衆官答て云ける

と早く大将と遣さし先峽關と固させ後大軍と催ふされ楚國  
 の勢を破り玉へ子嬰のこゝの從ひて韓榮耿沛兩人小五萬の  
 勢と授らと朱荊と共に守らせらる此時沛公劉邦の峽關を  
 攻らう小秦の新手勇猛能戦ひけるかど小數日破ることを  
 得む張良よとせ商量り秦の軍勢強くて輕々しくの戦  
 をとせよと秦の大將の君く賈人らりけとバ利を貪るの意  
 ある今関外小駁し旗幟を立て勢を張り又山上小疑兵  
 と設け陸賈酈生等が如き辯舌の者を遣て秦の諸將小  
 利害と説せ金を與へて悦むめ備のるを窺て不意小起りて  
 討とき必を勝んと云けし沛公よと小從ひて山々峰々旗を  
 立て大軍の体とるさめり酈生陸賈と遣さる酈生等らる



趙高の奸悪

六



趙高の奸悪  
二世の帝  
亡

繪本漢書軍談初輯卷之七

文政堂藏

関入り朱劄韓榮の對面。今秦の國無道ゆへて蒼生を悩  
 ます。天下ともゆふとを伐つ唯沛公のこころを將軍民を恤むの志  
 ありんぬ。早く沛公を降らばよ。沛公必む懷王の奏しつりて  
 重賞し萬戶侯の封さし。韓榮答へて曰ける。我秦の祿を  
 食ふがら。危急の臨んで背さば恩義の反せる作業あり。先生を  
 かく退きよ。心さるる思案せん。鄧生退き出けり。秦の  
 諸將の相聚り降らんと云ふものあり。降らばと云ふあり。議論  
 の心奪りて関を守らぬ怠まり。次の日鄧生又來り。諸將軍の如  
 何様の心を決し玉ふ。韓榮答曰ける。人皆降るまじと云ふ。我如  
 何ともさるる。鄧生をねて曰ける。將軍降り玉ふ。沛公深く  
 感せらる。儲千金を贈らば。將軍の徳を謝せらる。諸勢をたむ

らく退けて諸國の勢の來ると待ら韓榮辭して曰ける。我沛公と  
 敵國あり。何と賜物を受へけん。鄧生曰。今將軍贈物を受むん  
 ば是沛公と絶せら。天下の諸侯皆來り力を裁せて関を攻め  
 破らんと必定せり。其時何の面目めて沛公を見へ玉らん。今  
 贈物を受らば。他日の好と成玉へ韓榮最と許諾て爾らに  
 且く受納め。後の好とゆるん。願ふ和睦を調へて民の塗炭  
 を救はん。天下の福と云く。鄧生曰。最尔なり。我沛公を説  
 勧め。素寛厚の長者あり。必定和睦調んと。関を出てを回ける。

第十六回 沛公入咸陽宮蕭何収秦圖籍

尔程の鄧生の馳回らる沛公の云々の由告げし。張良乃曰ける。  
 早く此時を失せしむ。計略を以て関を破らん。薛歐陳沛兩人

七

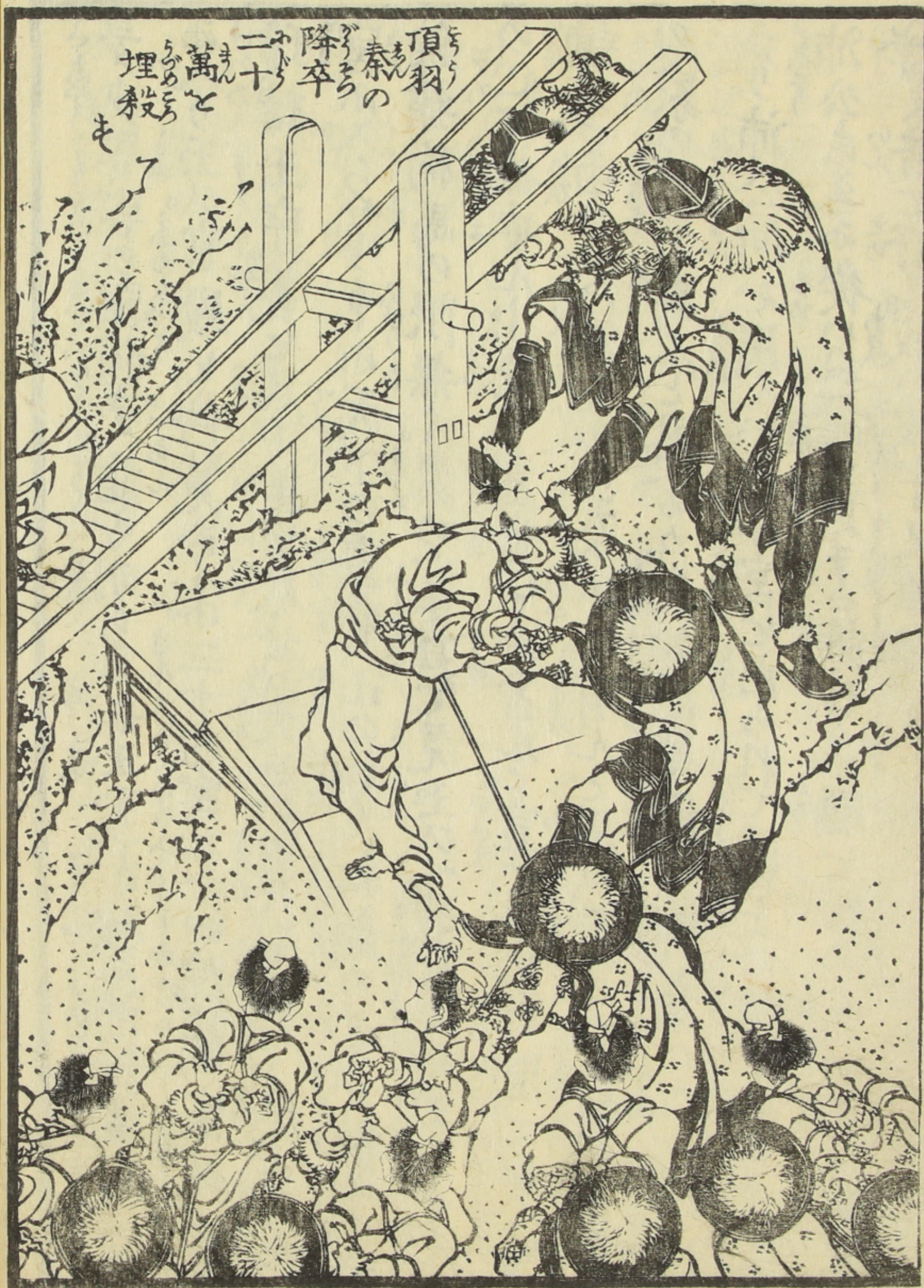


小數十騎の兵と授けり。山の後の小路より忍んで敵の後へ回し。  
 深山幽谷の火と懸て烟と揚て驚るを諸樊噲と先手と。大  
 軍一度の関前より攻蒐りるが秦の勢前後と救ふと能は  
 関を棄てて走るべと薛歐陳沛兩人の數十の兵と授けり。  
 乾けの柴の火薬と筆め小徑より廻らしむ此勢已小去  
 てより三日と過けし。関の前より惣軍勢鼓を鳴し喊を  
 揚げ皆我先ふと攻め登る秦の諸勢の麴生が回りと後の怠りて  
 何の備も爲ざりし。敵の大軍攻上るが上下周章騷動処小士  
 卒一人走來り。敵と関と起し。後小火を掛け候ふと云ふ  
 衆皆驚きて後と望めあり如何の火焰天小連りて鉄砲の聲  
 地と動と秦の軍震怕る。皆我先ふと逃し。先鋒樊噲真先

小関と起り攻上り勢小乘り追蒐る。討る者の數知し。韓榮  
 等の辛くく藍田と落行きて敗軍を聚め陳取る。沛公又夏  
 侯嬰と先陣と。惣軍勢潮の如く小押來る。又一支も支毛  
 去。咸陽と逃上る。時小己未の年。冬十月ありけり。五星東  
 井小相聚り。沛公敵と追まがめて霸上まで至りける。三世子  
 嬰の此由と聞玉ひら打驚馬。如何のせんと議せらる。小上大夫等  
 畢進出事已小極。早く降りて生民の塗炭と救ひ玉へ  
 か。三世子嬰の芭と放ち大さ小敷き哀して。小此義小従ふ。素  
 素車白馬小打乗りて玉璽と封し宮と出で軹道小到り降りける。  
 沛公大さ小喜びて禮とさる。對面する小子嬰乃ち曰る。我位  
 小在て徳さけし。將軍の陳小降参せり。願ふ一族萬民と憐

繪本漢書軍謀初輯卷之七 八





頂羽 秦の 降卒 二十 萬と 埋殺 せ

繪本漢楚軍談初輯卷之七

○文溪堂藏

小を驕りて人君乃まは此小來たり。天下の爲小害を除く先  
 身儉素を行ふ。然るを此小留りて樂とて一玉の人の秦の無  
 道と継ぐものなり。且忠言の耳小逆へど行ふ時の利ありと云ひ良  
 藥口小苦けと病の取りと利有と云ふ只願くハ樊噲が諫小  
 従ひ王へり。沛公悟りて府庫と封ト宮門どもと鎖し兵と引  
 上げ霸上の還り。諸侯の來ると待とける。此時蕭何云ひけるハ  
 天下久く秦の世の苛政を苦めり。今君法と寛柔て民と恤  
 まと玉ひるハ皆悦喜て服しん。沛公好とて次の日小郡縣の  
 父老と召と此等小告て宣ふ。秦の法令煩とて誹者とハ族  
 滅し私語者ハ市の斬て既小民の父母方の心小あらむと云ひ  
 べ。我懷王の命を受け。諸侯と共小秦と伐ち早く関小入る者を

王とせんと約し。我早く関小入し。必む此処小王とる。今  
 より法と約束し。三个條小定む。人を殺むものハ誅せん。人小  
 傷付け。或ハ又盜賊と爲者あらハ輕重小依て罪し。又此外秦  
 の法度とハ盡く除き去り。今我此処小來り。まは汝等が  
 爲小と害と除りん。而已るを汝等少も懼る。衆皆故の如  
 く安堵せよ。陣と霸上の還せ。後より來る諸侯を待ち。約を  
 定めん。爲ると。諭とて家小歸りしむ。尔て諸軍勢を戒めて。民の  
 物を掠犯るハ首と刎んと説示する。郡縣の父老額を撫で計  
 ぎりけり。今日復天日を見る。ふいと歡喜さる者無りける。此音趣  
 と落もる。秦の吏官小命せと。遠近とて觸さる。人民  
 愈歡喜んで羊と酒と奉獻し。沛公辞とて受け玉り。今陣中

貯あまふ。吾の之しき事あらむ。妄誕の民の財物と費まきと宣へ。人民倍感悦し。惟恐らく沛公の天下の君するまきと心は是を思へり。此時項羽の河北を平らげ。諸侯の兵を合せり。咸陽へ入らんと進まらば。己の日暮ふ及びしる軍を新城の屯させ。自ら陣屋を夜巡し。先づ秦より降参せし兵の陣屋を窺ふ。士卒聚集り。低語の我輩等章邯の欺誑を誤錯り。項羽の降参る。項羽の其性殘暴多て。又賞罰も明白らむ。今沛公の寛仁のて且殺伐を好まれば。只徳を以て人と懐柔け。早く咸陽へ入玉を定めて王とするの五のん恨らく。此人の從服きりし事よと。悔める体に見へけむ。項羽大まか敬馬駭き。本陣の回し英布を召し。秦の降卒二十萬。先づ降参らんと。己の謀反の心有り。我適ふ

立聞の頭と交へて低語り。不如早くあまを除き。後の患を免脱せん。汝三十萬の勢を率し。秦の士卒を殺まむ。章邯司馬欣董翳の罪なきゆへ赦し。おけ。范増聞て諫む。と。項羽のあまを聽せし。英布の下知を傳へり。秦の降卒二十萬を殘む。阮の殺しけり。章邯等の打驚き。項羽の命を乞へ。項羽是等小曰ける。汝等罪なき。畏らぬ。我密に窺ひ。聞く。汝が士卒反せん。とせり。此故は是を殺し。後の患を除くと。説示し。次の日の函谷関へと進荒む。此由霸上へ聞けむ。解生るる者進出で。秦の富多。天が下の十倍なる。地形疆し。今聞及ぶ。章邯の先づ項羽の降り。あまを項羽の乃。號し。沛公を雍王と爲む。関中の地の王とする。彼今則ち來らんぬ。君恐らく。此處と有ち。玉ふ。と。得む。と。急て

兵遣つらさる函谷関かんと守まもらしめ諸侯しよこうの兵へいを内うちらまはす稍関中しやうかんちゆうの兵へいを徵めし自みづから益えきて拒こぎ王わう沛公ばいこうこれこれを然しかとし扱あ大将たいせいを遣つらされ函谷関かんと守まもらしむは十一月中旬じゅういちげつちゆうじん項羽果くわくと諸侯しよこうを率ひきひ関かんの入いらんと欲ほつする沛公ばいこう已まふ秦しんと平ひららげ且かつ大将たいせいを遣つらして関かんを守まもらんと聞きくは沛公ばいこう大おほきの怒いかまを范增はんぞう沛公ばいこう早はやく関かんの入いりし此このころを守まもらしまし先まの先の先沛公ばいこう王わうの約やくの如ごとく秦しんの王わうと心こころをあはらしめ將軍しやうじゆん三年さんねん苦くる戦せんとし一旦いつたん他人たにんの有あるはらば豈あ千載せんざいの取とらる事こと項羽くわく打うち聞きけり沛公ばいこう勢せいの十萬じゅうまんの章邯しやうかんの強つよくしむは縦然じゆうぜん関かんと固かく争あはらしめ拒こぎ得えんは沛公ばいこうの將関門しやうかんもんと固かく守まもらして出敢しゅつかんとし項羽くわくの攻せうめをまし沛公ばいこうの將関門しやうかんもんと固かく守まもらして出敢しゅつかんとし項羽くわくの書簡しよかんと封ふうして箭せんの結むすぶは射入しやうにんして諸將しよしやうの馬うまを得える

馳ちせる覇上はじやうじやうの陣ちんへ贈くわり沛公ばいこうあらしめ見玉けんぎよふし其書曰しよひつ沛公ばいこう項籍しやうせき致ちし書しよ於お沛公帳ばいこうちやう下した嘗た與あ足そく下した受う懐王わいわう之の命めい約やく為な兄弟あにがへ興おこ兵へい破やぶ秦しん誅つとめし此こ無な道みち足そく下した已ま入い関かん雖すい因ゆ謀まう猷ゆ方かた略りやく之の速すみ而しか非ず吾われ之の立た懐王わいわう服ふく天てん下した降くだ章邯しやうかん以も制せい諸侯しよこう足そく下した何なに能え至いた此こ乎や乘のり人ひと之の功こう而しか奪うば為な己おのれ有あ一ひと大おほ丈夫しやうぶ所ところ不ず為な也なり方かた今いま拒こ関かん不ず欲ほつ吾われ入い然しか此こ関かん可べ能え久ひさ拒こ而しか不ず破やぶ乎や籍せき今いま雄ゆう兵へい百ひやく萬まん破やぶ関かん之の後のち足そく下した何なに面目めんもく以も見み籍せき速すみ関かん存ぞん大おほ義ぎ勿な失し兄弟あにがへ之の情じやう而しか後のち破やぶ秦しん之の功こう先ま入い之の約やく信しん自みづから有あ處ちよ焉や足そく下した熟じゆく計けい之の不ず宣せん

沛公もよきと見りて此事如何と議し玉へ張良進みて曰ける。誰の君が爲の計りと。関を守るありとぞ。沛公乃ち宣ふ。解生我の教あり。張良答へて曰ける。料る君が兵を以て項羽の敵し玉とんや沛公暫黙せしが固く不如尔らんものよきを爲すと奈何ぞ。張良復て答ふる。小臣思ふ。早く関を開て入玉沛公是に従ひて即時の関を開くべき。今と傳へ玉ひく。諸將の矢倉の打登り。そよへ寄る。大将の物申まき子細あり。馬と出され候らんと。呼る聲と打聞て。英布の馬と乗出せば。あま向て曰ける。我等沛公の命を受け。あの関門を守り。今全く魯公を拒み。あむ。他の盜賊と拒ぎ。この我君魯公の書簡を見て。関を開きて迎まらんと。早く命せらま候あぞ。速く御入あま。関門左右へ押開らけ。

英布の此由報き。項羽が大軍関に入り。戲の鴻門の陣と取る。尔ても項羽の問者を入。沛公咸陽に入り。その行状を尋ね。聞しむ。小晩に至りて馳回り。事精詳の告げ。項羽に思ふ。沛公が所存の疑ひ。懐王約の違を。関中小王とらんと爲者あり。尔ども我勢強大。彼と別處に押遷し。我関中小主とらんと。密に謀居。范増その夜。項伯と高阜の登り。遙の天を望見。萬籟更に無色。一天の星斗爛々。時。范増曰ける。公天文を知玉。項伯回答て我友。張良と云者あり。常の我の教あり。夫大将の道。天文地理と能知。其後兵を用。時々我の學が。我此故。略知。先。生指て示さ。范増は。璇璣の歩。次の經緯と按。五星。

の躔度十二周天二十八宿天下の分野三百六十有五度の晦  
 朔弦望北辰南極左輔右弼の至るまで一々まをせと説示し御方  
 の陣と望見の殺氣の天を衝渡りて將星甚ぞ壯るまを隠伏  
 の間小かた運氣遠大らざりける又霸上と望見の帝星耿々  
 とく龍虎五彩をみ水の始て達する如く日の方小外なる如く東  
 井奎壁の光を聚め霸陵真命の象と頭し雲旺氣と龍の星  
 本宮を照さ范增熟まをを見て項伯の問て云ける公沛公を  
 何と思ふ項伯答て曰ける帝星光と現く霸陵の旺氣の應む  
 る天運沛公の歸まるらん魯公の象の壯く殺氣剛風  
 群雄と能制する小應むるの范增嘆て曰ける昔年徐州  
 小雲氣起り今日ま帝星霸上の現む沛公實の天授るを

項伯問て曰ける先生まを如何せん范増答て禎祥のよ  
 天文の現るとも盛衰の本人事の決ま申包胥も曾て曰天定  
 まて能人の勝ち人定て亦天の勝る我今已小魯公の事へ豈敢  
 心あるんや盡忠竭力死して後ぬぢ已ぬべ天文假令斯ありとも  
 何ぞ心と変まをき今夜の事ハ惟公と某るを知者る必を洩し  
 玉ふると相伴て回りける

第十七回

項羽欲王關中計夜龍衣沛公之陣

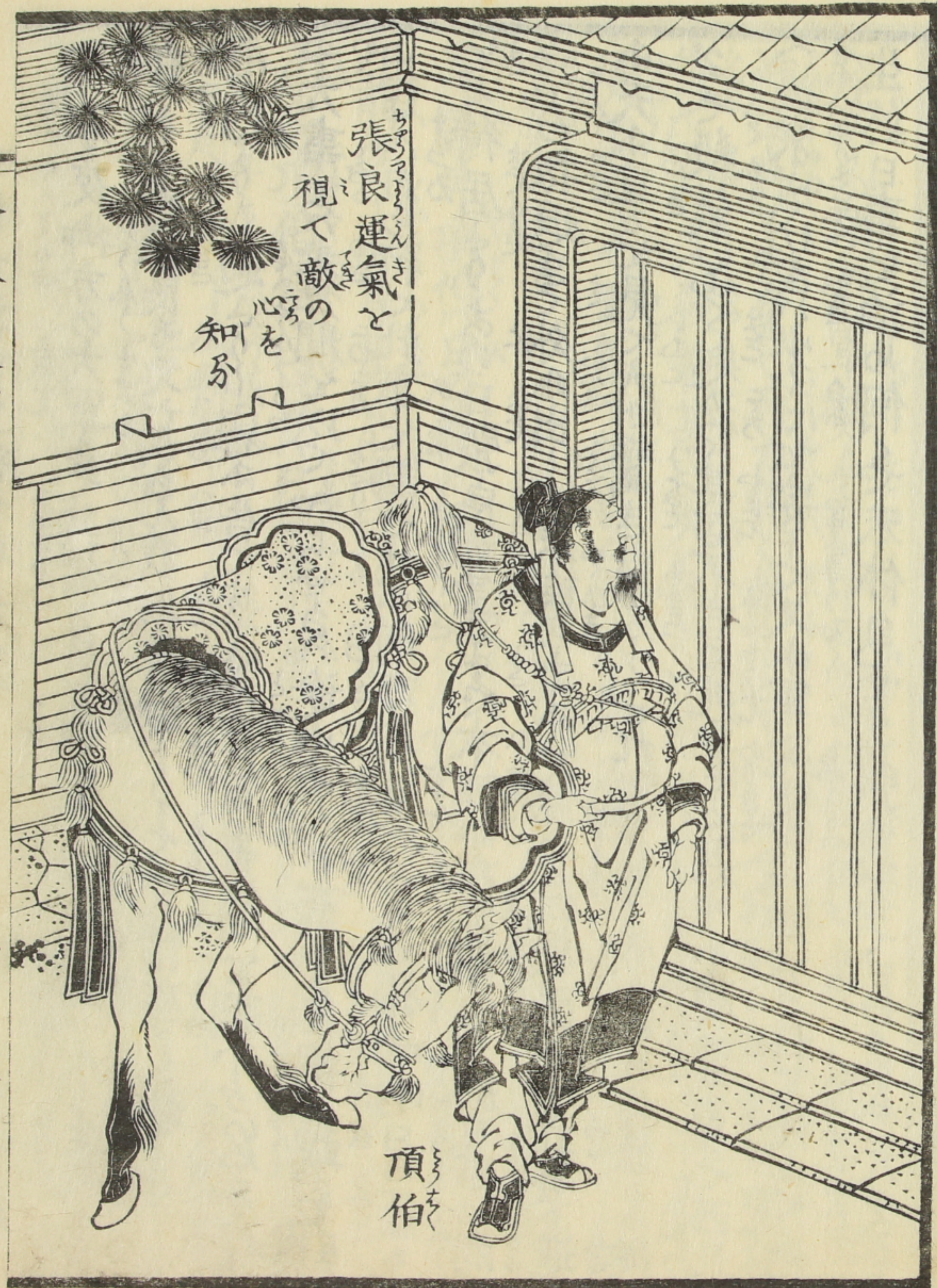
沛公項籍ハ如何り沛公と僻遠の地小左遷し我關中  
 小王とらんと思慮と惱むせら或日沛公の部下の將左司馬  
 曹無傷と云者より一大事の儀と告んとて書と献ると云けれ  
 急ぎ呼入對面し其書を取りて開見る其文曰



亮さし馬曹無傷謹而上書魯公幕下竊謂天  
下苦秦暴虐百姓不安產業幸賴明公神武千  
戈西向嬴氏束手制伏諸侯四海仰德如沛公  
則不過因人成事而今欲王關中使子嬰為相  
珍寶尽有之臣為幕下惜之幕下夫察馬臣無  
傷頓首百拜

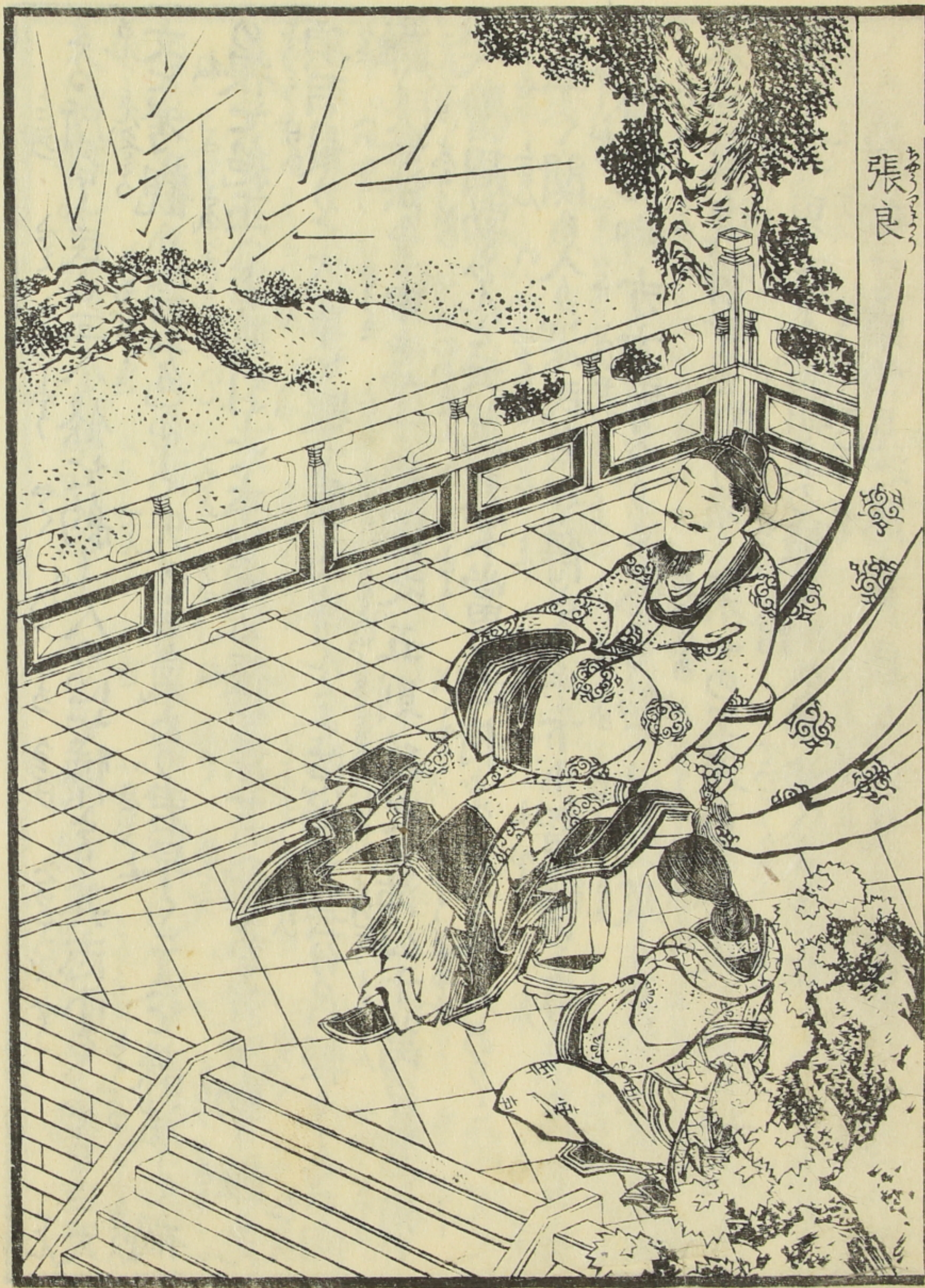
項羽見了て大の怒り諸將をめて云ける今沛公が関中の  
王とんと欲する事證據已の分明なり彼が部下の曹無  
傷志と我の寄て已の書簡を贈りし汝等如何の妙計  
あるに増乃曰ける沛公山東の居一時色を好む酒を嗜て  
人皆輕ん侮り今関中に入るを財物も取所なく婦女幸

る所を民と三ヶ條を約し人の心と懐き其志小るまて天  
文と考觀の雲五色の天子の氣あり君早くこれを誅滅して禍  
の根と絶玉若延引て本と固め根と深せ恐るはれと動難え  
項羽最のと大軍を驅て關上寄ると范增又云ける輕々しく向  
難兵法の申さや十則圍之五則攻之と沛公十萬の勢を領  
樊噲周勃さんと云萬夫不當の部將も五十餘人ありと聞況て  
や早く関に入り深民の心と得る手下の智謀の士をば必を依  
と成置ん御方大勢ありと又も始て此処へ來りこれ人馬疲て  
容易の進得んと難るる某一の工夫あり今夜三更の精兵を二  
隊に分て東西より關上の陣に向ひ沛公必を擒とらん去來と  
て人馬と揃け項伯見之思ふ我友張良沛公の關上の陣に従



張良運氣と 視て敵の 心を 知ふ

頂伯



張良

繪本漢楚軍言不轉卷之七

漢楚軍言

今夜御方の大軍にて其備を盡し伐んぬ沛公の兵一人も生残る者  
 有べらむ張良も又亡びるん我幼き時より交情厚く親まこと  
 骨肉よりも過るる密告て落さんと已の書簡を調へて名是程  
 の大事と書簡を以て知らせらる途中小人の奪はる禍の端を引  
 出さん自ら行て此事と語て共何方へも落行えんと獨喃昨日の暮る  
 とぞ待居りある日張良暮方まで本陣に在て沛公と終日事と商  
 議し扱退きて外に出る東南の方の一條の殺氣隠々と立登り遙  
 小天の星を見て大の驚き良久これと望居り一日の暮るる從  
 がつて殺氣の如く起り甚と不吉の兆ると其中の慶雲ありて西北  
 へ往來成けむ少と心を安んて又中軍へ來れば沛公これを怪て先  
 生終日事と治め何とて未休息せざる張良答て曰ける今天文を

窺ひ小項羽が軍勢今夜の中必を攻寄候らん早く備せ玉  
 沛公色と失りて我力弱く勢少る何以て項羽の敵をば張良  
 復て答るる殺氣甚と大いなく十分危小似まとも其中の中  
 慶雲ありて君を守護する應あり必を救ふ者有小似と御  
 心安んて至へく如何も議て禍いと免脱るんと説話や合戦の用意を  
 爲居り項羽の日の暮を待一人馬の打騎で密陣と出ければ門  
 の前まで丁公等是を止て曰ける老公暮る小只一騎何方まで出  
 玉を項伯答て曰ける小只今事の急ありて夫と窺ひ聞ん爲密其  
 処の赴くる丁公拜謝一通けり素項伯の項羽が爲小季子父めて  
 有ければ上下共之を尊び怕る老公とこそ申ける項伯走馬小鞭を加  
 へ飛ぐ如く小急程漸く霸上へ近きける小沛公の副將夏侯嬰

繪本漢楚軍討斬卷之七

夜巡不出之を見付何者るこ周章布馬を飛せ來るを項伯答  
 て曰ける我張子房が友なりき只今事の急ありて對面せしむ欲と云  
 夏侯嬰の怪るる伴ひ來りて門前の旗を守れる番卒の事云々と  
 示る右中軍を報せんと相傳て夜巡の官柝を擊ければ合圖や有けん  
 中軍の左の門を少開一人の大將高聲の何事あると尋れば夏侯嬰  
 の回答と我夜巡不出る小誰とも知む一箇の人物張子房の遇ん  
 と云此首趣と告らまよ彼大將のこれを聞其内内入ければ項伯  
 邊を望見るか一隊々々の陣營の旗幟を立連ね又劍戟を閃し軍  
 の備嚴重るれば心の裡の深感下実の沛公の尋常の輩あり有るべ  
 後天子の成んとて軍師范增が怖も理るのと思ひける此時張良中  
 軍を沛公と諸共の事を議して居るより外より報と曰ける今張子房

の友なりと急か逢んと曰人在奈何為んと伺ふぞ張良とれと打聞て  
 大さ小喜び此必だ慶雲の兆るんと走出り之を見れば楚の左尹の項  
 伯なりあまの如何と許さ我陣中の迎むる項伯密に低語て項羽范  
 増商議とて覇上の陣へ夜討して襲殺さん企て事落るる示る早伴  
 り何方か落行さんと催促の張良答て曰ける沛公先の韓王より我  
 と借て來りより龍遇極て厚りき今それ事の急を聞不願の不義  
 るる先告知まで叶ふまも足下須臾待王へ我尔せんと待りぬ本  
 陣の入り來り尔々の由告ければ沛公問て宣ふ若尔らんか如何と我禍  
 と免脱ん張良乃ち沛公の耳の根に立倚て箇様々々と低語り出て  
 項伯の白ける願ひ足下沛公の對面ありて詳なる事の動作を告げ玉  
 項伯辭退て曰ける我來るの專に御邊を救ん爲而已なり何ぞ沛

公小見也。張良まねて説ける。足下見玉へ沛公の寛仁大度の長者之  
見へり。とて何をも悪くさし強小伴るひ中へ入れられ沛公衣を整理  
出迎り手と携て上座と譲り敬小項伯乃ち座へ即ち項伯が真旨  
趣と又精詳の語ぬ沛公酒を勸々之と持成曰ける。我関中へ入  
り秦の宮室倉廩を固く鎖と一向小魯公の來るを待ちの。又  
何事と放す小執行候ぬ。き尔を疑ひ玉へらうと無罪由を語示り杯  
と舉壽。我聞足下ゆ男子有て未婚禮と玉のむと我幸小女有り  
只願ふ婚姻と結んで今日の徳を報ひん。又望らる足下ゆ再の陣所へ  
回れて我罪無の實を告魯公の怒を止玉へ項伯謝して曰ける。今是兩  
家並ひ立て互小智勇を争ふ。我婚姻と結ぶ。恐く人の議論を引  
んと辞退ハ張良傍より尔云玉へ項老公當初魯公と沛公の懷

王の御前へて約とさるり兄弟の盟と結び其後ハ二道へ分れ秦と伐  
今咸陽と攻破り事已ハ是定れり。尔ハ婚姻と爲とも許さ怪疑ぬ  
ま。項伯が衣の襟と取沛公の襟と結ある。劍を拔り之と斬各々半と分  
り。好と結の定と。斯とも辞退玉へらうと問へ項伯許諾して。其儀ハ  
従り。尔ハ一同喜びて又數盃と傾。項伯拜謝し曰ける。明日早く鴻  
門の陣屋へ來り玉へ。項伯小見玉へ其怒猶止らば我此よりて  
辞し歸り公の罪を盡趣と事詳く語る。尔されハ今宵ハ無事らんと  
相別て出け。張良乃ち夏侯嬰ハ二十騎と添送り。尔ハ鴻門の陣  
中へ。范增その夜の二更の頃項伯小見へて曰ける。時刻漸く迫付。早  
御馬と出され。項羽最もと心得て諸大將と聚る。項伯一人見され。范  
增怪しと尋る。項老何と見玉へ。丁公答てさん。今日晩方ハ只

一騎密窺事ありと陣門と出走られり。范増之と打聞て然有  
 らん中輕々しく兵と動難く。項老定めて沛公の我計略と洩  
 せん。若沛公の備あり。御方却りて敵方の計の陥らん。項羽答  
 て尔の有らむ。項伯の我叔父のき且忠誠の士の争不忠の意の  
 らん。先生深く疑ふる。范増復て曰ける。項老縱然忠ゆて露も敢  
 心と懐く。素陣中の機謀と云ふ。尺巖密と貴びて鬼神も測り知  
 らざぬ。兵家の於て要と存り。若少ゆるも洩る。時は福と生む。古  
 人も言さむ。機不密に害成ると。今夜の合戦且止めて重て計議  
 と面らさん。其言のまじりぬ。項老回り玉へり。人々是を告る。

訂正  
 補刻 漢書卷之七

